

## 令和5年度第2回恵那市総合教育会議議事録

日 時 令和6年1月16日(火) 午後1時30分～

場 所 恵那市役所 本庁舎 4階 第2委員会室

会議次第 1. 市長、教育長あいさつ

2. 議題

「学校でのいじめ・不登校の現状と取組み」について

出席構成員：恵那市長

(6名)

教育長

教育委員

小坂 喬峰

岡田 庄二

後藤 伸子

樋田 千史

西尾 修欣

村松 訓子

事務局：

副教育長

教育委員会事務局長

教育委員会事務局次長兼

教育総務課長

教育委員会事務局次長兼

学校教育課長

学校教育課担当係長

学校教育課総括主査

教育総務課担当係長

工藤 博也

鈴木 幸宣

佐々木 和美

丸山 頼彦

小木曾 健太

小栗 研

原 久晃

開会 (午後1時30分)

事務局次長兼教育総務課長

それでは、皆さん、こんにちは。定刻となりましたので、これより令和5年度第2回恵那市総合教育会議を開催したいと思います。よろしくお願いいたします。

本日、司会を務めます教育総務課の佐々木と申します。よろしくお願いいたします。では、着座にて失礼いたします。

本日の総合教育会議ですけれども、設置要綱の第5条に基づきまして会議を公開して、第6条に基づき、議事録も公表されますのでよろしくお願いいたします。お手元には本日のレジュメと、裏には参加者名簿、あとメモを用意しております。必要に応じてご活用いただければと思いますのでよろしくお願いいたします。

それでは、初めに小坂市長より御挨拶申し上げます。

## 1 市長、教育長あいさつ

市長 改めまして、新年明けましておめでとうございます。今年も昨年に引き続きまして、どうぞよろしくお願ひいたします。

とは言うものの、諸手を挙げて明けましておめでとうというのとも言えない状況でございます。というのも、1月1日の能登半島地震におきまして、多くの皆さんがお亡くなりになられて、そして地域は被災されております。教育に関するところで言いますと、今のところ、中学校、高校生の集団の疎開というか、移転して学びを継続していこうという、こんな取組もスタートしました。しかし、父兄の皆様とか子供たちにとってはなかなかつらい選択だろうなということを、報道でしか今伝わってないですけれども、接する中では、そんなことを今感じているところでございます。

市の職員も、消防も含めて、それから水道の給水車を持っていった職員、それから罹災証明を出すために派遣された職員と、何人かの職員が行っておりますけれど、非常に現地は大変な状況だということを伺っています。

市としましては、行政として、もしくは市民の皆さんと一緒に支援をこれからも継続していくという思いでおりますので、ぜひ皆様方からも御協力をいただけたらと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

という中でございますが、本日は議題としましては学校でのいじめだとか、不登校の現状と取組ということでございます。幾つか僕も思い当たるようなところがあります。1つは学校に行くことが子供たちにとって、人生のというか、時間の全てというようなことがある中で、同じような価値観の中で、なかなか生きづらい子供がいるという話を、私どもは伺っています。特にひきこもりなどの支援をしている団体の皆様にお聞きをしますと、やはり学校に行かなくてもいいよと言うだけで、かなり心が和らぐと。そういう中で、どんな新しい形での学びを確保していくかと、これはこれからの大きな課題になってくるのかなと思っております。

多様な学びの姿、それから人生を設計する中で、自分の目的に達するために、同じルートじゃないルートがあるということを、示すことも必要なんじゃないかなと思っております。

例えば、今、話題になっております南中学校の統合の話もありますけども、これも1つは統合という形で、1つの社会の中に子供たちを集めて集団の中での学びを確保するということです。これも1つですが、片方で、地域教育拠点施設という名前で、各地域にいても学びが継続できることを考えています。これは学び方としては新しい形の部類に入るかもしれませんが、学びを止めないこと、それから新しい形の学びが続けられるということを証明する機会でもあるかなというふうに思っております、丁寧にこの辺り、皆さんにご理解をいただけるようにしていきたいかなと思っております。

いずれにいたしましても、いじめ、それから不登校というのは、今多くの学校にとっても、そして地域にとっても大きな課題でございます。ぜひ今日もいろいろな御意見いただけたらと思います。どうぞよろしく申し上げます。

事務局次長兼教育総務課長

ありがとうございました。続きまして、岡田教育長からご挨拶申し上げます。

教育長 教育委員会を代表しまして、一言挨拶を申し上げます。市長さんにはスケジュールがタイトな中で、本日、総合教育会議を開催していただきました。本当にありがとうございます。

日頃、教育行政はもとより学校や県の様々な取組に対しまして、市からのご理解とご支援を賜っております。本当に感謝するばかりでございます。

また、今日は恵那市だけではなくて、どこにとっても大きな課題ではあるんですけども、そんなことを中心にしながら、市長さんと教育委員会が直接意見交換ができる貴重な場であると捉えております。有意義な会にしたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いたします。

## 2 議題 「学校でのいじめ・不登校の現状と取組み」について

事務局次長兼教育総務課長

ありがとうございました。

それでは早速、本日の議題に入りたいと思います。本日は「学校でのいじめ・不登校の現状と取組み」についてということです。

昨年度の春に一度、この議題についてお話しさせていただきましたけれども、少し内容等も更新されたこともございますし、やはりこの問題は、ずっと課題ということもありますので、今回もこの議題について、皆さんと意見交換会をさせていただきたいと思っておりますので、よろしくお願いたします。

それでは早速ですけれども、資料に基づいて、現状を説明させていただきたいと思っております。担当課のほうから、まずは「いじめ」というところの中で、現状と課題等についてお話をさせていただき、皆さんにご意見をいただきながら進めていきたいと思っておりますので、よろしくお願いたします。

では、説明のほうよろしくお願いたします。

学校教育課総括主査

「いじめ」について、資料に基づいて説明。

事務局次長兼教育総務課長

ありがとうございました。今、いじめのことで学校教育課で担当していることをお話ししていただきました。これからは少し意見や質問等がございましたらいただきたいと思いますので、順番にご指名いたしますのでよろしくお願いたします。

それでは、後藤委員から、よろしくお願いたします。

後藤委員 はい、お願いたします。いじめ問題というのは本当に一概に簡単に片づけら

れない問題だと思います。これだけたくさん件数を把握していらっしゃるということで、引き続きお願いしたいと思いますが、認知件数というのは、特に多い少ないで喜ぶことでもないと思いますので、ここに上がってこない、先ほど言われたような見えないいじめというのも現場の学校ではたくさんあって、対応されているかなと思いますので、できればそういったことも全部取り上げた上で認知件数が上がってくると、より分かりやすいかなと思います。その中で重要な、特に注目すべき事案とか、それをもうちょっと分けていただければ分かりやすいかなと思います。

先ほど定期的にアンケートでいじめの認知が多いということですが、定期的にとというのがどれくらいなのか、月に、学校によっても大分違うとは思いますが、1学期間に1回なのかお聞きします。

学校教育課総括主査

どの学校も最低限、学期に一度は行っています。多い学校ですと毎月行っている学校もありまして、ここは少し差がございますが、学期に一度は確実に実施をしています。

後藤委員 ありがとうございます。学期に一度で足りるものなのでしょうか。

学校教育課総括主査

ここは本当に、いじめアンケートという名前でのアンケートが学期に一度になっていますが、学校によっては、それ以外のところで、心のアンケートですとか、二者懇談の前に学校の取組の評価という、名前がまた違う形でいろいろ子供たちの状況をつかんでいますので、そういったものを含めると、もう少し短いスパンでのアンケートになろうかと思いますが、その辺り、ちょっと次に向けて、もう少し、いじめについてはこれだけはやっていますよということで、確実にお伝えできるようにしておきたいと思います。

後藤委員 ありがとうございます。

学校教育課総括主査

すみません、副教育長から一言。

副教育長 今回の補足で、大体いじめの調査でなく、今言われたように心の調査というのは、ほぼ月1回やっています、これは、今では法律でもありますので、学校全体、チームで取組めよというのがありますので、そのアンケートは必ず管理職まで上がってきます。午前中までには確実に上がってきて、それで気になったところについては校長が指示をして、学校帰りまでには必ずその件については何らかの対処をするという、そういうスピード感を持った取組をしています。また、先ほどのアプリもありますので、アプリとか生活ノートとか、それについても確実に、その日に上がってきたものはその日のうちに管理職に上がるよということ、研修をしておりますので、そういった取組はしております。

後藤委員 ありがとうございます。自分自身の考えですが、早目の対策、対処という

のは本当に大事になってくると思いますので、今のような対策をぜひとも続けていただきたいと思うのと、個人で抱えてしまう先生がいらっしゃるかもしれない、生徒がいるかもしれない。チーム学校ということをやより強く、いろんな教員の方に浸透するよというということも、よろしく願いいたします。

副教育長 わかりました。

事務局次長兼教育総務課長

ありがとうございました。それでは樋田委員、ご発言をお願いいたします。

樋田委員 樋田です。「心の天気」というものがありましたね。ずっと前からやっているとありますが、そこでもう一步進んで、一人一人の情報を得ると。例えば、その子は何曜日にいつも曇っているとか、それから、この心の天気が不登校にもつながるとしたら、そういった曜日とか時間帯とか、そういうのも分析して、あるいは追求していくと、何か他のことが見えてくるかなと思いました。だから、せっかくいい、このアプリがありますので、それをうまく活用して、その子に合った触れ合い方というのを検討していくといいかなと思います。ただ先生が忙しくなる。今、スリム化で、働き方改革というのがあって、どこまで先生が動けるかということも、問題になると思うのです。だから、そこに補佐する人が担任以外で、予算的なものもあると思うけれども、そういう人がいれば専門的にやっていけるのではないかなと思いました。ただ担任だけが大変というのは、昔はそうだったけど、担任が苦勞した。けども、その考え方も古いね。なので、今の新しい時代の中で、何かやっていけるといいかなと思いました。

それから、いじめの件数は、僕も校長のときに、いじめの件数を、何でも拾いました。消しゴムを取られたとか、鉛筆取られたとか、百何件ありました。それを県事務所に届けたらクレームがつきまして、この学校が東濃の中ではるかに多いと言われて。では、どう報告したらいいかと尋ねたところ、問題になって長引いている事のみくださいということでした。それはほとんどゼロでした。けれどそれが大分変わってきて、今、本当にささいなことでも本人が嫌やと思ったことをアンケートに上げてくると、そういう時代に、こうなってきましたので、件数は増えてきていると。全国的にもものすごく増えてきている。それはいいか悪いかは分かりませんが、その子供たちが表現する場ができてきたと、捉えていくといいことかなと。

だから心の中にしまっておくのではなく、今みたいにアンケートを月に1回、あるいは学期に一回でもいいので、やはり定期的にやることと、タイムリーにやるのが大事かな。学級の雰囲気の中で、これまずいなと思ったら、1か月に一回ではなく、1週間に一回とか、その辺は担任が見破っていくことが必要かと思います。それもこれから進めていけるといいかなと思いましたね。

はい、以上です。

#### 事務局次長兼教育総務課長

ありがとうございました。今の中で、少し心の天気のアプリで分析をするというお話をいただきましたけれども、その辺りは何か学校のほうでは分析とかはしている状況はありますでしょうか。小栗先生、どうでしょうか。

#### 学校教育課総括主査

生徒指導の主事研修会が年に4回ございまして、前回の会の中で、ここの天気のアプリの使用状況等を確認しました。そうしますと、ほぼ毎日のように使っている学校もあって、そこは、今、樋田先生がおっしゃられたように、毎日の変化の中でやっぱりつかんでいくことができているということです、かなり効果がありますと伝えてもらっています。

ただ一方で、アプリを開くのにログインをしなければならないとか、ちょっとその性質上で少し戸惑うところもあって、なかなか毎日というよりも1週間に一回とかいう学校の頻度にも差がありましたので、その辺りについても、どういのが効果的で、その学校の実態にどんなふうに即しているのかということ、今の生徒指導主事の中で共有認識しながら進めているところですが、そこから分析をしてということまではまだ行き着いておりませんので、今、大変貴重なご意見をいただきましたので、今後に生かしていきたいと思います。

#### 事務局次長兼教育総務課長

ありがとうございました。今、本当に貴重な意見をいただきましたので、これからの課題として捉えていければと思っています。よろしく願いいたします。それでは、西尾委員、よろしくお願いします。

#### 西尾委員

はい、お願いします。  
いじめの発見で、本人からのアンケート、それから保護者からの連絡ということが多くということでした。まずは保護者からの連絡を受けるに当たっては、学校側が教職員の先生方と保護者との関係によってはちょっと雰囲気が変わってくるかなという気がします。それ以前の問題として、そのいじめ云々という以前の問題として私が常々思っているのは、学校の先生と保護者との信頼関係、人間的な付き合いができているのかなというところ。そういったいい関係の上に立っていないと、いろんなものが歪曲して見えてしまうこともあるだろうし、まずはその先生方と保護者との関係性も重要なベースになるだろうなと思います。

もう一点、子供たちの発するSOSを受ける側、心の相談員の先生であったり、スクールカウンセラーさんだったり、当然担任の先生ということもあるでしょうけども、受ける先生方の、心の持ちようといいますか。言葉は悪いですけども、あまり危機感を持っていない先生が対応されると、もしかしたら見落とししてしまうこともあるんじゃないかなと思います。

他方、じゃあぴりぴりと神経質になっている先生というのも子供にとってはどうかなというような気もします。だから、その相談を受ける側の先生方の心の

ケアとまでは言いませんけども、状態というものも、常に健康であるべきだと、そんなことを思います。

以上です。

事務局次長兼教育総務課長

ありがとうございました。今の中では、保護者と学校との信頼関係というところでありますけれども、20年前と今とは大分保護者の形も変わっている中で、その辺り、信頼関係みたいなものは、副教育長さん、昔と比べるとどうでしょうか。

副教育長 そうですね、少子化ということもあって、昔のようにたくさんお子さんがいたときとは比べて、大事なお子さんということで、ちょっと保護者さんの気持ちは強くなってきているなというのは感じております。ですので、学校としては、信頼関係づくりで心がけているのは、先ほども言いましたけれども、やっぱり早期対応、これは次の日になったり、2、3日たった後とか、そういったことのないように、すぐに連絡するということや、日頃から、そういう問題行動にかかわらず、いろんなよい姿があったときに、日常的に連絡を取り合って、親さんと関係をつくっていくとか、そういったことも大事なので、そういうことは昔から変わらず取り組んでいるところです。

確かに先生の危機感についても、なかなか管理職であっても、ちょっと大丈夫ですか、抜けているんじゃないですかということもなきにしもあらずということがあるので、そこら辺も含めて大きな構えで研修をすることと、その有効なのはやはり事例研修、こういった事例でこんなふうになりましたよということ是非常に有効なので、そういったことを取り組んでいきたい。また、定期的な打合せですとか、日常的な雑談の中で出てくるようなことを情報共有しておりますので。保護者さんは、確かに厳しいですけど、子供さんを思っている気持ちというのは変わらないので、そこにちゃんと寄り添っていくということにはなると思います。

事務局次長兼教育総務課長

ありがとうございました。先生方のケアとか、そういったこともまた教育委員会の中でも1つの課題になると思いますので、重く受けとめたいと思っております。

それでは、村松委員、学校現場にいたことの実験からお話いただけると助かります。

村松委員 お願いします。中学生ぐらいの女の子になると、SNSでのいじめというか、相手を否定するのに、子供たちがディスると言いますが、ディスられた、ディスられたと言います。相手を否定するのに直接言わずに、その子の好きなものや、その子が推している何か、アーティストとか、そういうのをLINE上で否定してくる、いきなり。でも、いろいろ聞き取りとかしても、直接言っているわけじゃないから、それはいじめじゃないというふうに捉えられてしまう

というか、目に見えないものというのが一番怖いというか。ある日突然無視が始まったり、女の子でありがちですけど。原因が分からないのに、もうずっと、急に1人になってしまったとか。さっき言った、私にだけ挨拶してくれなかったとか、何か、そういうことが本当に何回も起きていました。

そういうことがあるたびに思うのは、学校によって温度差があってはいけないなどというのは思うのです。で、関係していた生徒には、時間を割いてでも一人一人話を聞いてほしいし、又聞きだけじゃなくて、担任の先生だけの負担というのではなくて、もちろん養教の先生だったりとか、学年主任の先生だったりとか、情報を共有しながら、もうそこは本当に苦しくて学校行けなくなる子もいれば、苦しい思いをしながら学校に来ている子もいるので、そこは本当に徹底してやってほしいなと思います。

事務局次長兼教育総務課長

ありがとうございました。

その場の現場にいらっしゃった村松委員ですので、子供たちの心の中とか、そういったこともよく御存じでしたので、実際の話聞いてよかったですと思います。そのほか、何かご意見ありますでしょうか。これからこうしたらいいとか、何か要望とかございましたら。

よろしいですか。いじめから、また不登校のほうにも話はつながりますので、引き続き不登校の状況について事務局より説明をよろしくお願いいたします。

学校教育課総括主査

不登校について、資料に基づいて説明。

学校教育課担当係長

発達障害といじめ、不登校の関係性について、資料に基づいて説明。

事務局次長兼教育総務課長

ありがとうございました。今、不登校についてと、それに関連する発達障害と不登校といじめということについて、担当課のほうから説明がございました。市長のほうからも冒頭にお話をされましたけれども、今、南地域の中学の統合の中で、新しい学びの場所というものを少し検討しているところでございます。この不登校に少し関連することもございますので、少し地域教育拠点施設について、事務局長のほうから説明をいただきながら、後で教育委員さんのほうからご意見等いただきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

では、事務局長、お願いいたします。

事務局長 地域教育拠点施設の概要について資料にて説明

事務局次長兼教育総務課長

ありがとうございました。地域教育拠点施設について、お話をさせていただきました。新しい学びの場というところの中で少し説明をいただいたところです。それでは今、不登校のことで説明をいただきましたけれども、事案にもありましたように、いろんなパターンがございました。そういったことも含め教育委

員としてのお考えと、あと今年、大阪府の茨木市に、このいじめと不登校のことについて研修に行きましたので、それも絡めながら恵那市と茨木市との違いとかも参考にご意見をいただきたいと思いますので、よろしく願いいたします。

それでは、今度は村松委員から、よろしいですか。何かご意見、ご質問もあれば、よろしく願いいたします。

村松委員 今の説明を受けてですけど、相談室と言っていたのを校内支援センターですか、と改名するという、それすごくいいなと思いました。教室に行けない子とか、時間差で登校してくる子だけを集めて、ただただ、学校に来たというだけで、それでも最初の一步ですけど。でも、そこで過ごすときに、1人1台タブレットがあるので、教室の授業風景をそこで見ながら自分で学習計画を立てて学習したり、遅れている子はもっと先に戻って、みたいにタブレットなどを使って少しずつ復習していったりとか。そういう学習の場としても相談室が生かされるということは、すごく、何か前に一歩前進したなという気がします。相談室へ登校してくる子は、それぞれ家庭にも事情があって、発達障害を持っている生徒もいましたし、本当に人それぞれ、先ほども言われましたけど、家庭の環境だったり背景だったり、その原因、いじめだったり起立性の頭痛を持っていたりとか様々でした。ただそこにいてだけで、給食を食べて帰っていくとか、話をして帰っていくというだけではなくて、それぞれがちゃんと少しずつでもプログラムを持って、作成して、それに取り組む学びの場というふうに言い換えることができるという意味では、校内教育支援センターという名目で、また新たに相談室がちょっと扉を切り開いたような気がして、すごくいい取組だなと思いました。

いろいろな問題は多分山積みだと思いますけど、とてもそういう意味では、本当、恵那市は手厚いなと思います。タブレットの学習を通じて場面緘黙の発達障害の生徒が発話することができていたり、そういうことも見てきているので、いろんなところに交流に行くと話をすると、すごく手厚い取組ですねと言われる。茨木市は大きいですけど、人材も豊富な気がします。1人の生徒に対して関わってくれる先生だったりとか、相談員だったりとか、支援員さんもたくさんいたので、それはもう人口の違いとか組織の違いもあると思います。この恵那市の規模でこの取組というのがすごく継続していったほしいなと思いました。大変なことですけどお願いします。

事務局次長兼教育総務課長

ありがとうございました。この校内教育支援センターは、今、全校で設置されているということでしょうか。

学校教育課総括主査

今現在は、相談員さんがいてくださっているところに相談室というのが位置づいているので、イメージとしては、相談室がこの校内教育支援センターになっ

ていくというようなイメージを持っていただけるとありがたいです。来年度は、何とか各8つの中学校で、この校内教育支援センターという名でスタートしたいなということで、今、準備を進めています。小学校が同時期にスタートしないのは、小学校はどちらかというとなかなか落ち着けない子が多くて、その部屋に入って、じゃあ別室で落ち着いて勉強というようなことではなく、ちょっと気持ちを落ち着かせるための別室というような位置づけのほうが強いので、これまで同様の相談室の扱いで、小学校は進めていくほうが得策かなということで、今、相談をしているところです。

事務局次長兼教育総務課長

ありがとうございます。来年度からは、中学校でこういった支援センターができるということですので、子供たちが気軽にに行けるような形でいい取組かなと思っています。

それでは、続いて西尾委員をお願いします。

西尾委員 はい。お願いします。

話を伺っていてまず思うのは、いろいろなケースに応じて非常にきめ細やかな対応をしてくださっているということを感じました。これはとてもありがたい話であります。

地域教育拠点施設にしても、それから校内教育支援センターにしても、ましてや支援センターの中でも、また分室をするというようなことになれば、なおさらですけれども、スタッフがどうしてもたくさん要ることはもう目に見えています。そこを恵那市として、市長さんはじめ手厚い予算をつけていただいて、人材を確保してくださるということは、全くもってありがたいことではあります。そういったところが不要になれば、それにこしたことはないのかもしれませんが、先ほども話が出ていました、20年前の教育現場とは随分、今と違うということで、昔はそんなものというような表現で片づけてしまっていたことでも、今は取り上げて対応していかなきゃならない、そういう状況である以上、やはり手厚い対応というものは必要になってくる。そのためのスタッフの確保等々、予算づけから始まって、人材の確保も含めてですけども、そういったことに手をかけてくださっているのは非常にありがたいと。

そういったことに甘えてばかりでもいかんのかなとも思います。というのは何かというと、やはり親さん、先ほどの話でも親さんも病院で受診をしてもらうようなケースもあったというようなことですので、いろいろな状況があるのだなということを改めて思うわけです。ただ、やはり子供さんにしても親さんにしても自助努力というものも、どこかで必要な場面はあるだろうというようなところもありますので、そういった啓発といいますか、これは教育委員会でやるべきなのかどうなのかは、それは分かりませんが、そういったこともまた考えていく必要があるのかなと感じました。以上です。

事務局次長兼教育総務課長

ありがとうございました。やはり今も支援する人材の確保、そういったものをお願いしたいということがございましたので、その辺りは、最後に市長さんにご意見等いただきたいと思います。

では、樋田委員、よろしく願いいたします。

樋田委員 質問ですけど、「起立性障害」というのはどんな障害ですか。

学校教育課総括主査

一般的には朝起きられずに、午前中、どうしても頭がぼーっとしてしまうような症状があるお子さんがここ最近増えてきています。自分の今の認識でいくと、朝起きることが難しく、起きられたとしてもすぐに体がうまく、元気よく動かせないような状況で、少し時間をおくとだんだん体が動けるようになってくるというような症状だと認識をしています。

樋田委員 夜遅くまで起きているからではなく。

学校教育課総括主査

そうではないみたいです。一般的には、やっぱり生活リズムが崩れて朝起きられないというお子さんも、当然一定数いますけど、そういう子たちだけじゃなくて、朝、どうしても起きられない、ちゃんと寝ているのに、睡眠時間はあるのにという状況もあるそうです。

樋田委員 やっぱり医者が要るのかな。

学校教育課総括主査

起立性障害は医者さんの診断が出ます。

樋田委員 特別支援学級入ったときに、子供は苦勞して来ていると、体力を使って。だから入ってきたらすぐ体温を測るとか、血圧を測っていくと良いという話をききます。話は変わりますが、アウトリーチ。中学校の不登校の子が90何名もいると。8校で単純に割ることはできないと思うけど、そのスペースは、各学校につくれますか。92人分のスペースは。それ1つ、問題があるかな。1つの部屋ではやりにくいことになる、集団ができない。そうなる、また困ることになる。

学校教育課総括主査

はい。

樋田委員 そういうブースをつくらないといけないかもしれないけども、それも1つの課題かなと思います。で、もうちょっと大きく考えたときに、何で勉強するのか。例えば親さんたちは何を考えてみえるかと。中学校卒業したら、進学を考えてみえるために勉強をさせるのかということの思うね。だからその辺のところを、そうではないよと、人間性を高めていくことは、やはり人生の設計の中で、学びの場というのは、別に中学校じゃなくても高校でも、僕ら年を取っても勉強の場はあるわけ。で、資格も取れるようになってくる。そうしたときに、もっと大きく捉えたときに、その子の一生を大きく捉えたときに、本当に勉強は、一体何なのかということ、不登校の生徒にも親さんにも話していくと。不登

校の生徒は卒業させますか。

教育長 今は卒業させます。

樋田委員 するよね。

教育長 15までは義務教育です。

樋田委員 義務教育ですからね。

それで、やっぱり勉強、何のためにするか、その辺のところを、例えばタブレットを使って、一人一人勉強させていって、知恵をつける、学力をつけることの中で、学力は、その子にとってどういうのが学力なのか、その辺のところを担当者が把握していて、この子は勉強しなくてもいいよみたいに、それぞれの個性にあった対応。それぐらいの大きなくくりでもって接していくと子供は楽になると思います。親さんも何か楽になるような気もします。だから不登校になる子は何か原因があるかもしれないけれど、ちょっと先には、その辺の高校進学、あるいは大学進学のことをネックになっているかもしれません。それゼロではないと思いますが、そういうことを考えてみると、何かもっと気楽にね、まあいいや、勉強しなくてもいい。この前、武並小学校へ行き、特別支援の子が、パソコンを使っているときに、その子は、プログラムで車を動かすわけ、自由に動かす。だからそういった面では支援学級の子は、一生懸命やる子は、何か得意なものを持っているわけです。だから、ほかの不登校になった90何名の子も何か得意なものがあるかもしれないので、それを伸ばしてあげるとか、人間としての生きざまというか、そういうところの根本を何か論していくような支援ができないかなと思いますけど、結論はないですよ。それはないけども、勉強はしないと。でも、いつでも勉強はできるということを思うので、その辺のところ、もう少し違った目で物を見ると、違ったことが見えてくるかもしれないと思います。以上です。

事務局次長兼教育総務課長

ありがとうございました。それこそ市長さんが言われたような言葉で、自分の将来のためのルートづくりの学びというのが、まさしく今、樋田委員さんが言っていることとすごく一致したのではないかなと思います。今後の参考にしたい話ではあったのかなと思います。ありがとうございました。

では、続いて後藤委員お願いします。

後藤委員 皆様のご意見と重なる部分もあると思うんですが、学校に行けない子というのは何人かいます。これという理由がない場合もあります。突然行かなくなっただけで、突然また行けるようになるということなので、悩みがとても深いし、親さんもとても悩んでいる方も多いです。

学校に行かなくてもいいのだよと子供に言ったときに、確かに子供はほっとしますけど、なかなか親ってそれは言えないですよ。最初学校に行けなくなったときに…。何で言えるようになるかという、これは私の考えですけど、ほかに選択肢を見つけたとき、学校に行かなくても、例えば「むつみ教室」だっ

たりとか、そういう方向があると。通信で学ぶこともできる、タブレットで学校に行かなくても授業が聞けるとか、何かそういういろいろ道筋を見つけられたときに言える言葉でもあるかもしれないと思います。だから子供にとって地域教育拠点施設もそうですし、いろんな居場所がこのようにたくさんつくられていくというのがとても大切なことじゃないかなと思います。

もちろん毎日行くものなので、学校に居場所があるということも大事だと思いますが、それ以外の方法というのも、またどんどん増やしていけるといいのではと思いました。

先ほど樋田委員も言われたように、この先、何のために勉強するかということで、茨木市の一人も見捨てへん教育のとき、そこでお話を伺ったときに、この子たちが将来社会で生き抜くための力をつけるために、今、小・中でこういう対策をしていますということをおっしゃっていました。ただ勉強をする、学校に行くということが目的ではない。メタ認知能力とか、いろんなルートがあるよ、社会で生き抜くために、いろんなルートがあるよということをお子たちに示しているということも話されていました。とても大事なことだなと思います。茨木市では、その学校に行かない子たちがほかの学校じゃない場所に行ってお料理してみたりとか、自分のやりたいことをちょっとやってみたりとかいうので、自信を取り戻していくという取組もしていたので、そういったことも恵那市でもできるといいかなということをおもいました。

こんな話を聞きました。朝、こども食堂を学校でやっているという。ごめんなさい、記憶が確かじゃないですが、家庭環境の問題がある理由で、御飯食べてこない子も多い中で、学校で朝食を、もちろんボランティアの方が来てくださって、軽食を出すという。で、不登校の子がちょっと減ったというようなニュースをやっていました。そこまで学校がやるのかどうかということもありますけど、そういうのも1つの事案ということであるということをお伝えしたいと思います。

あとは皆さんおっしゃっているように、とにかく人材のパワーが要ることだと思います。また茨木市の話ですけど、学生ボランティアや有償ボランティアがとても多いということをおっしゃっていました。恵那も学生の方、教員を目指す学生の方もきっといると思います。そういったところも、専門家の方がいっぱい来てお金かけてというのも、もちろんそれもいいですが、いろんなところに子供たちのために何かしたいと思っている方たちがいると思いますので、ぜひそういった方たちの力も借りて、子供たちが充実した教育を送れるようにということを切に願っています。

あと、不登校といじめということでお話をされておりますが、どの子に対してもしじめ受けている子、いじめ受けてない子と学校行けている子、学校行けてない子、勉強できる子、勉強できない子、どんな子でも、学校が、学校に行きたいと思えるような、何かそういったもの、そこだけ特化させて何かをするん

じゃなくて、学校全体の底上げというのも、みんなで考えていきたいということだと思います。

以上です。

事務局次長兼教育総務課長

ありがとうございました。教育委員の視察の件を含めながら、後藤委員の思い、保護者としての思い、あとは、教育委員会としても学校全体の底上げをしていきたいという、そういう思いを伝えていただきました。ありがとうございました。

時間も押してきましたので、いじめと不登校のことについて、教育委員の皆様と、また教育委員会からも少しご回答とかささせていただきました。

このことについてでもよろしいですし、全体的にお話ししておきたいことがございましたら、いい機会ですので、どうでしょうか。

西尾委員 じゃあ、せっかくです。

以前、定例会のときにもお話をさせていただきましたけれども、子供の居場所というのは本来家庭がベースにあって、そこから学校に行ってきます、学校から帰ってきて、ただいま、おかえりという、そういう居場所という家庭が本来であるべきでしょうけども、そうじゃないところも、あってもいいのかなと。ただし、ただいま、おかえりが言えるような場所というものが子供にとっての居場所かなというような気もしますし。

それから、先ほど私の発言の中で、親さんと先生方との関係が良好であれば、子供たちはきっと居心地がいいはず。どこに行っても自分のことを知っている、家に帰っても、学校に行っても、親も先生もみんな自分のことを知っている、自分のことを知ろうとしてくれているという環境というのは、子供にとっていいはずだと思います。だから、そういった気持ちの、心の安らげる居場所、どこに行っても居心地のいい環境というものが、どういう形であれ、目指していかなきゃいけないんじゃないかなという、そんな気がします。

以上です。

事務局次長兼教育総務課長

ありがとうございました。そのほか、いかがでしょうか。

それでは、まず教育長のほうから今日の会議の中での意見についてご発言をお願いできますでしょうか。

教育長 今、ちょうど学校と市教委で懇談会をやっていますけれども、その中でも話題にしますけども、何を学ぶかとかね、これからそれが大切かなということは今聞いて思いました。

その中で、1つのキーワードになってくるのは社会的自立ができるような力をつけましょうと。それは学校じゃなくてもいいし、でも文科省も、学校へ来なくていいと言っているつもりではなくて、できれば学校に来てというのがいいのだけれども、学校だけがそれを担うんじゃないよということを行っています。

昔で言う読み書きそろばんという、そういうこともできないと思うんですけども、それ以外にどんな力をつけていったらいいのかって考える必要があるなということを思っています。

それから、一人一人を大切にするために、一人一人に本当は人がつけばいいのかもしれませんがけれども、私が昔、教員をやっていたときには、割とその集団がね、一人一人を支えてくれているという部分もあったなど、ちょっとあの子、勉強が不得意だけど、いやいや、みんなであの子のいいところあるのだから、ここ頑張ろうとかいうのもあったのだけど、そういう力がちょっとずつ弱くなってきているなど。もう少し言うと、もう自分のことで精いっぱいというね、子供が増えてきているなというところも、ちょっとこれは私たちの課題かなということを思っています。

義務教育の間は自分探しかなということも思っています、何になりたいという、それは持てればいいのだけど、それよりもまず、自分って、ああ、こんな一面があったとか、こんなよさがあったとか、あ、こういうことちょっと苦手だなとか、そういうことが分かるような、そういう体験を数多く義務教育の間にさせてあげたいなど。そのために、今、地域の人たちの力もお借りしながら、様々な体験をやっているのではないかなということを思っています。

なかなか数が減らないというのは現実ですけども、できることをやっていきたいなと思うし、やっぱり最後は人かなということを思っているんで、そういう人を発掘するのも私たちの仕事ですし、そういうような人を育てるのも私たちの仕事ですし、なかなか使命は重いなということを思いながら今聞かせていただきました。

以上です。

事務局次長兼教育総務課長

はい、ありがとうございました。

それでは最後になります。今の皆さんの意見をお聞きして、市長さんから御挨拶をお願いいたします。

市長 改めまして、今日はまた活発な御意見をいただきまして、本当にありがとうございました。幾つか頂いた意見を踏まえて、私からも少し申し上げたいと思います。その前に全体的なお話を少しだけ申し上げていくと、速報値でございますけれども、今年度生まれる子供の数が、コロナ後もあって随分と減っているんですね。昨年1年、令和4年で大体230人ぐらいの子供が生まれたんですけど、どうも今年はそれを、200を切りそうだというのが、今、現実のところでございます。

これから先の、その少子化というのは、教育の理念についても、結構な影響を及ぼすと思いますので、これをどういうふうにしていくかというのは1つの大きな課題ですし、人口減少と少子高齢化は一体的な課題として私たちは捉えています。これはちょっとあまりうれしくないお話でありました。

それから逆にうれしいお話は、御存じかもしれませんが、住みたい田舎ランキングという雑誌に載りまして、恵那市が取り組んできた中では、特に子育て世帯、それからシニア世帯に関しては、3万人から5万人クラスの中では、日本一ということをいただきましたけども、その裏では、様々な施策と言いますけど、それが一応評価されて、スコアになって、点数として加算されたという意味では、やってきたことが間違っていないくて、これをうまくやってきたことをもっともっと伸ばして、少子高齢化を何とか少しでもソフトランディングと言うんですか、減らしていけるようなことができないかなと思っています。こんなこともありまして、市としては、特に子育て支援に向けたパッケージとして、新年度の予算を出す予定でございまして、発表できるのは来月になると思いますが、今、最終の詰めをやっているというところでございます。

経済的な負担をまず減らしたいというのが一番大きなところになってきますけれども、それでもできる限りそういったお声に応えられるようにしたいというふうに思っているところであります。

そうしたことを踏まえまして、特に後半部分でありました不登校のお話について、幾つか御意見いただきましたので、この辺りも少し申し上げます。よく言われるのが、コップに水がいっぱいになるという話が、これ、アレルギーの話ですと、アレルギーはコップの中に水がどんどんたまっていって、あふれるとアレルギーが出て花粉症になる、鼻水が出るようになるというのと同じで、今度は逆にコップの水がたまってない人は学校に行けないと、聞いたことがあります。多分、学校に行くって、結構エネルギー要るらしくて、行くにはある程度エネルギーがたまると行けるけど、空っぽになっちゃうと、もう何もできなっちゃうということだそうです。その行くためのエネルギーをためるのは、何かできるかという、それは楽しいことがあるとか、いいことがあるとか、承認されるとか、きっといろいろあると思うんですけど、そういう意味では、不登校って単純に怠けているとか、そんな話ではなくて、やっぱりちゃんと元気を取り戻せるような仕組みというのが必要だなということを僕自身は認識をしています。

もう一方で、実は、もう既にお話ししたかもしれませんが、ドワンゴさんがN高校をやっておられ、これは主に不登校の子が多いですけど、通信制の高校で、この間も新聞に載りましたね、通信制の高校の進学率がすごく増えていて、通常の全日校が逆にちょっと減っていると。これはどういうことかという、一つは新たな学びの場を皆さんが求めているというのが一つと、もう一つは、社会性はなくても学びは続けたいということの思いがあるということです。この間、新年の挨拶に県の教育長さんのところに行ったら、通信制のN高校も含めた通信制の教育は、この東海3県は、ナンバーワン、ツー、スリーで、おおよそ7%ぐらいはあっているということで。そういう意味で東海地区は割と高いですねと、こんな話を聞きました。これも1つの方法かなというふうに思っ

ています。

僕はN高校をやろうということは全然思っていないですけど、ただN高校がこれから始めようとしているZEN大学という通信制の大学ですね。これは四年制の大学です。こういったところをうまく活用することで、学びの新しい姿が提供できないかなということは今考えている最中です。何が言いたいかということ、1つの、その登校するというエネルギーだけじゃなくて、学びを継続するには何ができるかということ、全体で考えていけるとうれしいなということでございます。

それから、思い立ったところで幾つか申し上げますと、最後に西尾委員が言われた居場所のお話で、家庭か学校かみたいなお話で、これは何年か前から、コロナ前から言われている話では、サードプレイスという言葉、これは社会人でよく言われるんですけど、仕事か家庭かで、職場でもなくて、家庭でもない場所が、サードプレイスと言われるところに集まると。

これ、スターバックスがよく言われていましたけど、コーヒー飲みながら仕事しましょうというような、第三の居場所というので、サードプレイスといいます。こういう考え方は、結構前からあったんですね。どこか二者択一ではなくて、幾つかの別の居場所があっていいじゃないかということも、僕らこれから先は考えないといけないかなというふうに思っています。

ただ、片方で、人的なリソースというか、支援する人の話も出ましたので、この辺のところも、恐らく教育長さんは、今までコミュニティースクールをずっと進められているということで、コミュニティースクールって地域の皆さんの力を借りて学校をうまく運営していくとか、地域のことを学ぼうということですけど、恐らくこの辺りがもう少しバージョンアップすることで、新しい、その人的な支援の形が出るかなというのがまず一つ考えられます。

それからもう一つは、恐らくこれからその支援してくれる人って、目の前にいる人じゃなくて、もしかしてネットの向こうの人かもしれない。全然関係ないところで、でも、この人のこの言葉で私は元気になりましたということ、今でもちょくちょくあります。そういう意味では、新しい支援のあり方というものも、一つの課題に即して考える可能性があるなというふうに私自身も、今、皆さんの話を伺いながら思ったことでございます。

どちらにしても今おっしゃられたお話は、恐らくいじめとか不登校だけの話ではなくて、教育全体の話を考える中で、いじめとか不登校に対してどういうふうな手当てをしていくかという議論につながっていくと思いますので、そういう意味では、これは本当に手厚くやらないといけませんし、恐らく学校運営、教育の話を議論していくことが、最初に申し上げた人口の減少とか、子供たちが減っていくことに対する一番大きな答えになっていくと僕自身は思っています。そういう意味では引き続き頑張っってやっていきたいなと思っています。どうぞよろしくお願いします。

事務局次長兼教育総務課長

ありがとうございました。それでは、お時間となりましたので、これで第2回  
恵那市総合教育会議を閉じたいと思います。本日は多くの意見をいただきました。  
本当にありがとうございました。

閉会 午後3時5分